

日本社会学の展開

東北大学名誉教授

新 明 正 道

学部長挨拶 社会学部創設 20 周年記念講演会を始めるにあたりまして、一言ご挨拶と講師の新明先生についてご紹介させていただきます。社会学部は昭和 35 年に当時の文学部社会学科、及び社会事業学科を母体として、新しく時代の要請に答えて創設されました。今日も会場にお見えでございます当時の文学部社会学科主任教授で私の恩師でもあられる大道安次郎先生を中心にして新しい学部作りが行われた訳です。昭和 35 年の出発当時のスタッフは今日の半数位だったと思います。そんな状態から一步一步前進してようやく 20 年の年輪を重ねた訳でございます。昨年は幸い、アメリカのハーバード大学より世界的に著名なタルコット・パーソンズ先生をお迎えして、講演会、講義を持つことができましたが、今年は、この 20 周年を記念致しまして、記念講演会を企画した次第でございます。本日講師としてお迎え致しました新明正道先生は、長く東北大学に奉職されておられました方で、日本の社会学会の最長老と申しあげて差し支えないと思います。それは先生のキャリアが永いという意味だけではございません。先生は大正の末頃から今日迄、一貫して社会学の研究活動を活発に続けておられます。昭和 40 年以降をとりまして大きな書物を 4 冊程出版されておられます。日本の最長老であると同時に、第一線の学者として最も理論的水準の高い先生です。業績は主な単行本だけでも 40 数冊に及び、論文を入れると数えきれない程の多数にのぼります。先程ご紹介致しました初代学部長大道安次郎先生が新明先生の学問について「新明社会学」という本を 1 冊書かれている程に膨大な研究業績をお持ちです。また先生が日本の最高の社会学者であるという一つのメルクマールになるとと思いますが、数年前、先生は社会学者として初めて学士院会員に推され、現在ご活躍中でございます。

また先生は昭和初期に東北大学に移られたのですが、それ以前の大正 10 年から 15 年の 3 月迄の満 5 年間を関西学院の文学部教授として、文学部社会学科の揺籃期に力を尽されました。そういう意味も含めて、私達とは切っても切り離せない御縁をもつ先生であります。先生の学問的特質に関しては「新明社会学」に次の 3 点があげられています。それは、行為関連の立場という独特の行為理論を展開されており、次にそれに基づいて先生独特の新明社会学といわれる総合社会学の立場を確立しておられること。第三にその総合社会学というものがパースペクティブの広い壮大な体系性を備えているという事です。今日は、日本社会学の展開というテーマで、先生のパースペクティブに基づいてお話を頂きたいと思います。先程申しあげ

日本社会学の展開

ました3点の特質も恐らく関わってくると思いますが、皆様と一緒に先生の理論を勉強したいと思います。では早速先生のお話を伺うことにいたします。

ただいま学部長先生からご懇切なまた過分といってよいご紹介にあずかりましたが、卒直に申しますと、私はこの度関学社会学部20周年記念に際し講演のお招きを受けまして非常に光栄に存じましたものの、反面また最近亡くなられたアメリカの大社会学者パーソンズ教授が昨年来学されて長期にわたって集中講義をされたその後にはまかり出て、この私が一場の講演をするということはやはり私にとりましてかなり重荷であるように感じないではありませんでした。それにもかかわらずあえて私にご依頼を承諾して今日のようにこちらへ参ることにしたのは、もはや半世紀を越えた昔のことになりますが、私が大学を卒業して最初に教鞭をとるようになったのが当時神戸市の東端にあった当学部の前身の関学文学部社会学科であって、しかも私が最初に社会学の研究を始めたのもそこであり、私にとりまして当学部が二重の意味でかねてから学問的な故郷のイメージを与えていたからであります。

私は大正7年東大法学部に入学してから政治学科に在籍し、一応3年間は政治学の研究をいたしました。したがって、卒業後私が教師として関学に招かれましたときは当初はただ政治学の講義を担当するだけの約束になっておりました。ところが、いざ就職がきまってしまうと、学校当局からは政治学とあわせて社会学の講義も受持つてほしいという注文が出て来まして、これにはいささか閉口いたしました。といいますのは、大学で1年生のときには選択課目のなかに社会学も入っていて、当時文学部の教授だった建部博士がこれを担当しておられましたが、私はただ一回テストとして講義を聴講しただけで結局他の課目を選択してしまいましたので、在学中私は社会学の専門書は1冊も読まず、とうとう社会学については全くの門外漢として卒業することになったからであります。しかしそれでも大学では新人会の運動に関係していたせいで多少

社会問題の書物を読んでいたもので、激励してくれる友人もあり、やってやれないことはないと思って社会学の講義を引受けることにしましたが、政治学はともかく、社会学については皆目無知同然の有様でしたところから、関学に来てからは自分の勉強時間の大半を社会学の研究にあてて手当たり次第内外の社会学書を買って求め、これを読みおわるとすぐ一夜漬の知識を学生諸君の前に吐き出し、少なくとも社会学に関するかぎり一面教師であると同時に反面また学生であるような生活をしばらくの間反復していたものでした。当時どんな内容の講義をやっていたものか、今から思うと冷汗の出る思いがいたしますが、こうした苦勞もあっただけそのころの思い出にはひとしお感慨の深いものがあることは事実でして、そのなつかしさも手傳つてついこのようにこちらへまいりまして講演するようなことになってしまった次第であります。

ところで今日の講演の題目はご指定もありまして「日本社会学の展開」となっていますが、日本社会学の展開といひましてもその歴史は明治のはじめに社会学が欧米から移植されその研究が発足しましてから今日にいたるまですでに1世紀を越えて百十余年に及んでおりまして、その全体にわたってお話をするにはかなり長い時間が必要となって来ます。そこで私は一応今日は私が社会学の研究に着手した大正年代あたりを出発点としまして、私自身の研究の軌跡を辿りながら当時から現在にいたるまでの日本社会学の展開について大ざっぱなお話を申し上げるにとどめたいと思いますが、ふり返ってみますと、私が関学に赴任して来て社会学の研究に乗り出した大正年代は明治以来の日本の社会情勢に一転機をきざした時期であったと同時に、それはまた日本社会学にとりましても一つの新しいエポックの画された時期でもあったといつてよかったです。

大正の初期にはご承知のように第一次大戦が勃発し、やがてそれがイギリスやアメリカを中心とした連合国側のドイツに対する勝利をもって終結しますとともに、世界を通じて民主主義の機運が一せいにもり上がって来ましたが、この間ロシアでは共産主義革命が成功して今日のソ連が出現するという歴史的に

日本社会学の展開

大きな変動も生じました。そして、このなかにあつて日本もまた新たな激動の時期に突入していたものです。日本では明治の初年維新とともに自由民権運動が台頭し一時民主主義が全国を風靡するいきおいを示しましたものの、20年代以降明治憲法が制定されてからは政府の弾圧によってその氣勢もそがれ、年とともに反動的保守化の傾向が顕著になって来たものですが、大正年代に入りますと、日本が連合国側に加担して参戦した影響もあつて、再びまた民主主義の思想や運動が燃え上がつて来たものです。私が大学に入学した大正7年8月には全国的に米騒動がおこつてついに元老軍閥を基礎とした寺内内閣が総辞職し、そのあとに日本でははじめてといつてよい原敬を首相とする政党内閣が出現いたしました。当時すでに日本では政党を中心として憲政擁護運動が展開されますとともに、思想界にも民主主義の主張が台頭しつつあつたものでして、私が大学時代教えを受けた吉野作造先生の如きはこの大正デモクラシーのなかで民本主義の名においてその思想的なチャンピオンとして元老軍閥を相手どつて果敢な闘争を続けておられたものです。

しかもこの時期にはまた私が研究し出した社会学の学問的状况にもかなり後代に大きな影響を及ぼすことになる変化が生じつつあつたものでした。社会学の研究はそのころにはヨーロッパからアメリカへ、それから日本にまでひろがつて来ていましたが、もともと社会学がフランスやイギリスを基盤として発生して来ましたところから、それまではやはりヨーロッパの社会学が事実上世界的に指導的な地位に立っていたものです。ところが、戦後になりますと、これまで久しくその影響下にあつたアメリカ社会学のなかにも社会調査にもとずいた特殊的研究がさかんになって来て、やがてこれはその独自の学問的伝統として確立され、アメリカ社会学をして少なくとも量的にはヨーロッパ社会学を凌駕するほど有力な地位を占めるように発展させる基盤を築き上げるにいたつたものでした。これと同時に、ヨーロッパ社会学のなかでもこれまではコントやスペンサーの出た関係からフランスやイギリスの社会学がこれを代表するものと見られて来たものですが、戦後になりますと、ドイツでは帝政が崩壊して自由

主義の零囲気のなかで学問的研究が自由化されたせいもあって、社会学の研究が驚異的にさかんになり、たちまちにしてドイツ社会学は理論的に一時世界を指導するかと思われるほど絢爛多彩な数々の注目に値する業績を生み出したものでした。これはこの時期に入ってテンニェス、ジンメル、マックス・ウェーバー等の社会学が改めて再認識されますとともに、またオッペンハイマー、シェーラー、アルフレッド・ウェーバー、マンハイム等によってそれぞれ特色のある社会学の組織化が推進されたからであります。そのなかでも特に注目をひきましたのは、ジンメルが広義の社会のなかから政治的、経済的、文化的な「内容」を捨象した「形式」としての関係ないし集団を狭義の社会の概念として規定し、これを対象とすることによって特殊科学的な社会学を樹立しようとした企図を受けついで、フィーアカントやフォン・ウィーゼ等がこの時期に入って相次いで社会学の組織化を試みましたが、ジンメルの形式社会学につながる特殊科学としての社会学がにわかにな新型の社会学として宣伝されますとともに、一時これがドイツ社会学の主流をなすかのような勢いを示すにいたったことでありまして、その影響はアメリカや日本にも及んで来ましたが、それは日本の場合特に強大であったと云ってよかったです。そしてこの時期において逸早く日本でドイツに発生したジンメルの形式社会学に注目してこれを基準とした社会学の組織化を企図し、日本社会学に新しい一転機をもたらした第一人者こそは京都大学の米田庄太郎博士の門下から出た高田保馬博士にほかならなかったものであります。

高田博士は大正2年「社会学原理」のなかですでにアメリカのギディングスやフランスのデュルケームの所説を参照しながら基本的にはドイツのジンメルの形式社会学の見解を容れて特殊科学的な傾向を帯びた社会学を組織しようとする企図を明示されていましたが、大正12年の「社会学概論」ではこの方針をさらに明確化し、ジンメルの形式としての社会の概念を一面において実質化し、これを結合の事実と規定しながらも、ジンメルと同様に社会学を総合的なものではなく、結合の事実だけを対象として研究する分析的な一つの特種的社会科

日本社会学の展開

学であると説き、この見地に立脚してきわめて論理的に整合された社会学の大きな組織を展開されたものでして、それはドイツのフーアカントやフォン・ウィーゼ等の同類的な企図と比較してもこれに劣らないばかりか、組織的な点ではかえってこれにまさるものがあったといってもよかったです。大正年代には明治30年代から日本社会学界に君臨して来た建部博士がなお健在でして、博士は大正11年退職されるまで東大でなお講義をされていましたが、高田博士が出現されますとともに、次第にその栄光にもかげりが生じ、建部社会学の時代にかわって高田社会学の時代が到来しつつあったことは事実です。

こうした世界、ひいては日本の社会学の状況は私が関学に来て社会学の研究を始めてから次第に判明して来たところですが、この間私にもっとも強い刺激を与えたものはやはり高田博士の「概論」だったといつてよいでしょう。私はこれを読了してから早速関学高商部の機関誌「商光」に「社会意識について」という論文を書きましたが、これが発表されてから間もなく、私の許へ高田博士からぜひこれを一読したいというお便りが来て、これにはいささが驚いたことを記憶しています。それはともかく、これをきっかけとして、その後最初の間は主に英米の社会学書を読んでいた私もジンメルをはじめとしてさきに申し上げましたドイツの形式社会学の系統に属する諸学者の著書を買って入れて勉強してゆくことになりましたが、そのうちに私の書いたものなかでも社会学を問題とした論文の数が次第に多くなって来たものでして、やがて世間的には私自身政治学者というよりかむしろ社会学者と見られるようになって来たようです。そのせいか、大正15年(昭和元年)東北大学に社会学講座が開設されますと、私はその担当者として招かれることになり、ついに関学生活5ヵ年にして仙台の方へ転任することになりました。

東北大学に移りましてから、私は職掌柄社会学だけを研究し講義することになりましたが、当初2ヵ年ほどの間私はこれまでドイツ社会学のなかでも主にジンメル以来の形式社会学の研究をやって来ました関係から、形式社会学を新型の社会学としてとらえ、その学問的性格の究明を中心とした特殊講義を試み

ことにいたしました。そのころには林恵海氏の「ジンメル社会学方法論の研究」や井森陸平氏の「形式社会学研究」などが出ていましたものの、まだ形式社会学が社会学としてどのようなものであるかについてはかならずしも一般に正解されていないきらいがありましたので、一応これを紹介しながら説明してみようというのが私の当初の心ずもりだったわけであります。しかし私はこの講義を続けてゆくにつれて、次第に形式社会学の基本的立場について疑問を抱くようになり、最後にはこれに対してかなり多くの批判的な意見をもつようになって来たものでした。私は昭和3年この講義の原稿に筆を加えて「形式社会学論」を公刊しましたが、批判にあたる部分が全巻の3分の1以上を占めるようになったのも一にそのためであります。私が形式社会学に不満を感じなくなったのはジンメルのように広義の社会の概念を形式と内容に区分することは論理的に不可能でないとしても、政治や経済や文化などの内容を排除してただ抽象的な関係や集団を形式として研究するのは、いわば魚の肉を切りすててその骨だけを魚として研究するようなものでして、これでは魚をまとまった魚として全体的かつ具体的なものとして研究することが出来なくなるのではないかという疑問が自然に湧いて来たからにほかなりませんが、こうした気持の底にかつて大学で政治学を学びまた社会思想関係の書物を読みふけたころ身につけた、そして大方の社会学者がまたこれまで対象として来た広義の社会のイメージがなお力強く私に生き残っていたこともまた事実です。

私はこのように最初はひとまず本格的な社会学の研究を形式社会学の研究から始めたわけですが、研究を進めるにつれて私は形式社会学の成果を摂取しながらも最後にはこれに不満を感じずにいたったものでして、昭和4年岩波から出した「社会学」のなかで私が改めてこれまでの広義の社会の概念に立ち返って社会学を新しく総合社会学として再組織する方向を探求しようと試みましたが、こういう気持がうっせきしていたからにほかならなかつたものであります。こうした私の考え方はその後私がヨーロッパに留学してドイツで親しくフーアカントの教えを受け、フォン・ウィーゼその他の形式社会学者と接触し

日本社会学の展開

これからも変わらず、私は20年近い滞独中の後半は形式社会学よりはむしろこれとは別流をなしているオッペンハイマー、シェーラー、アルフレッド・ウェーバー、マンハイム等の社会学に関心を寄せ、最後にはフランクフルトでマンハイムの講義に顔を出し、後のフランクフルト学派のホルクハイマーやポロック等とも交遊して昭和6年日本に帰って来ました。そして、それからは、しばらくの間私は一方マンハイムに刺激されて知識社会学の研究を進めますとともに、他方さきの「社会学」のなかで提示した着想にさらに手を加えて自分なりに総合社会学の組織化を進め、昭和7年の「社会学序講」や昭和10年の「社会学要講」のなかではアメリカ社会学における社会力の概念やマルクス主義における生産力の概念などを参照して、経済、政治、文化等の人間的作業を社会の基本的原動力とみなし、その発動の過程のなかで経済的、政治的、文化的等の社会が形成されるものと説いて、いわば形式と内容とを再統合した社会の概念を中心として形式社会学の形式一辺倒の抽象的な立場を克服しようと試みていたものです。

私が帰国してから間もなくドイツではヒットラーのナチズムの運動が発展し、昭和8年ヒットラーが政権を把握するにいたって、ドイツの政情は急変し、これと同時に第一次大戦後のドイツ社会学の黄金時代にも終止符が打たれるようになりました。ヨーロッパではヒットラーの登場とともに戦雲が濃厚化して来てついに昭和14年第二次大戦の勃発を見たことはご承知のとおりです。日本でもこれと前後して昭和6年満州事変が勃発し、昭和12年にはこれが日中戦争に発展し、昭和16年には太平洋戦争の火蓋が切られ、日本もまた第二次大戦の渦中に巻き込まれることになりました。こうした状況は学問的研究にとって決して好ましいものでなく、日本でも振り返ってみますと、社会学の研究にとって不利な条件がかもし出されて来たことは事実です。しかし日本の場合では、ドイツとちがって社会学はかならずしも学問としてその命脈を絶たれたわけではなく、その後日本社会学はドイツ社会学の影響を受けながら、見方によってはドイツ以上の発展をさえ示したと云ってよい盛況を示すにいたったと云ってよ

かったほどであります。

私がさきに大正年代高田博士がドイツの形式社会学をもととした結合社会学を組織化して日本社会学の学問的水準を世界的に高めるとともに、その影響がたちまち全国を風靡するにいたった状況について申し上げましたが、博士は昭和年代に入って九州大学教授になって法文学部で経済学の講座を担当されてからは、その社会学の体系がひとまず完成されたせいもあって、社会学よりもむしろ経済学の領域で活躍されるようになったものでして、表面的には高田社会学は大正年代の末期ほど指導的な意義をもたなくなったような印象を与えています。しかし大正末期から東大で建部博士の後をおそった戸田貞三博士も理論的には高田博士と同じく形式社会学の立場を肯定されていた関係からその門下からは特殊科学としての社会学の立場を標榜する学者がかなり多く輩出しており、高田博士の直系としては関学の小松堅太郎教授が昭和7年の「社会構造の理論」その他で強力に高田社会学の発展を試みていたものでして、高田社会学はこの時期でも依然として日本社会学を支配する権威をもち続けていたといってさしつかえなかったのであります。

このなかにあつて私などは関西にあつて高田博士によって形式社会学の研究に誘導されながらも東北大学に移ってからは次第に形式社会学、ひいては高田社会学の立場から離れてその反対の方向に進んで来た異端児ということになりますが、昭和年代に入ってから日本社会学の展開を振り返ってみますと、私のように形式社会学に対して疑問ないし不満をもち、別流の社会学を開拓しようとしていた学者は決して少なくなく、特に若い世代の学者の多くは大なり小なり形式社会学に対して批判的な態度を持っていたと見てよかったです。当時は大正デモクラシーの後をうけてマルクス主義が勃興していた時期でもありましたので、マルクス主義の立場を容れて別流の社会学を構築しようとしたひともあり、当時慶応大学で社会学を講義していた加田哲二教授などは昭和3年の「社会学概論」や昭和6年の「近代唯物社会観の発展」などでうかがわれますようにかなりマルクス主義的色彩の強い立場に立っておられたものです。

日本社会学の展開

当時いかにマルクス主義の影響が強かったということは、この立場から社会学そのものを全体的にブルジョア的なものとして否定しようとする社会学批判の傾向が一時社会学のなかに発生したことによっても確認出来るところでして、その花形役者となったのは昭和8年「社会学批判序説」を書いた清水幾太郎氏や昭和9年「現代社会学批判」を書いた早瀬利雄氏などであります。しかしこれほどでなくても一般に形式社会学に安住定着することが出来ず、何等かの意味でその狭隘な限界を脱却しようと試みた学者はかなりの数に及んでいたものでして、昭和年代のはじめにおこって来た文化社会学の傾向などはこれを代表するものと見てよいわけです。そのきっかけをなしたのものとして当時阪大にいた関栄吉氏が昭和4年に出した「文化社会学概論」を指摘することが出来ますが、昭和18年になって「文化社会学」を出した蔵内数太氏などもかなり早くからこの潮流に棹さしておられたものです。そして昭和6年ごろ社会学研究会の名でドイツの文化社会学ないし知識社会学関係の著作を翻訳刊行した樺俊雄氏や坂田太郎氏等のグループも一面においてはこの傾向に属していたといつてよいでしょう。このなかにあつて、もっと形式社会学に密着しながらも、その社会学の規模を拡大しようと企図したものとしては、別に当時関西大学にいた岩崎卯一教授や当時法政大学にいた松本潤一郎教授があり、岩崎教授は昭和2年の「社会学の本質と体系」以後高田社会学を基点としながらもその社会学の規模の拡大に努めていましたが、松本教授も同一の意図をもって総社会学の名において社会学を形式社会学以上の規模に拡大しようと企図し、昭和10年の「社会学原論」、12年の「集団社会学原理」、13年の「文化社会学原理」を通じて形式社会学に対応する集団社会学を基幹としながらさらにこれに社会過程を対象とする過程社会学と文化を対象とする文化社会学を加えた三部門から成る独自の社会学の組織化に専念されていたものでして、事実上この時期の日本社会学にとっては形式社会学やこれを基準として成立した高田社会学をいかに修正するか、あるいはこれをいかに乗り越えてゆくかということが理論的問題の焦点をなしていたと見てよかったです。

この間私は、さきにも申し上げましたように昭和8年の「序講」や10年の「要講」では自己の立場を総合社会的なものとして決定し、社会力の概念によって形式と内容の概念を再統合するとともに、これによって形式社会学の立場を克服し得ると考えて来ましたが、その頃総合社会学との関係でデュルケームやマックス・ウェーバー等の著作を読んでいましたうちに、私はマックス・ウェーバーの社会学の出発点をなしていた社会行為の概念に特別強くひきつけられるようになって来ました。彼があえて社会行為の概念をもって社会学の出発点たらしめたのは、これまで社会学のなかで社会を集合主義的に有機体的なものにとらえる傾向が支配的であって、とかく社会が主体的な人間を単位として成立している点が看過されていたのに対して、あえて人間の行為を重視し、これによって社会の考察を実質的に精密化すると同時に、その歴史的な性格を強調しようとする念慮から出たものですが、私はこれをもって機械的な感じの強い社会力の概念よりももっとよく人間的作業の主体的な性格を把握することが出来ると同時に、これによってたまたまよく形式と内容との区分を越えた社会の全体的な本質をも表明することが出来るのではないかと考えるようになりました。そこで私はウェーバーの場合、後の意味はかならずしも一義的に明確にされてはいませんが、あえてこの意味をも含めて彼の社会行為の概念を受けとめ、社会の内容と形式との相即的な統合性を浮彫りにするために、これまでの社会力のかわりに新たに行為関連の概念を設定し、これをもって社会学を組織化するための基本概念たらしめることにいたしました。私は昭和13年「行為関連の立場」という論文のなかで一応この立場を明らかにし、続いて昭和14年これを中心とした著書「社会学の基礎問題」を書き、さらにその続巻として昭和17年「社会本質論」を公刊しております。私の行為関連の立場の特徴は、「社会本質論」の序文にも述べていますように、第一にはこれによって社会における人間の主体性ととも、進んでその歴史性や実践性をも明示しようとしたところにありますが、これらとあわせて私の場合この概念に行為を通して社会の形式と内容との相即的統合性が含意されていると見ているところにその独自の

日本社会学の展開

特徴もあるわけです。私にとりまして総合社会学の立場はかなり早くから決定されていましたが、その基本をなす社会の概念を形式と内容との分割を越えた全体的なものとして再建することはかならずしも簡単でなく、そこにまた苦心もあったことは事実ですが、私は一応この行為関連の立場に到達してからこの問題を解決し得たものと考え、これ以降はずっとこの立場をもって自己の最後の立場たらしめ今日にいたっているわけです。

ところで、私がこの行為関連の立場に到達するまでに直接的にもっとも示唆されるころの多かったのは、ドイツのマックス・ウェーバーをはじめとして、アメリカのミードその他の社会行動主義者だったことはもちろんですが、全体として私の総合社会学の立場から見て私に積極的な意味でモデルを提供して来ましたのは、フランスのデュルケーム、イギリスのホブハウスやギンスバーク、ドイツのオッペンハイマーやマンハイム、アメリカのソローキン等の学者でした。しかし、これとは反対の批判的な意味でこの間終始私の関心をひき、逆に理論的な刺激を与えて来たのは外国ではやはりジンメルでありまして、彼の形式としての社会の概念の批判こそはまさしく私の総合社会学の出発点をなしていたものです。私が19世紀の末葉にジンメルが提示した形式としての社会の概念を終始批判の対象として来ましたのは、一に私自身、彼の形式と内容との概念の分析を論理的に承認しながらも、これを逆転してもとの広義の社会の概念を再構成することをもって私の総合社会学の目標たらしめて来たからにはほかなりませんが、私が執拗に彼の形式の概念の批判を長年にわたって進めて来ましたところから、富永健一教授などは私をもって形式社会学の破壊者とさえ呼んでおります。しかし私は彼の形式としての社会の概念を否定し形式をもって本来彼のいわゆる内容と相即的なものと見る立場に立脚してはいますが、彼が形式の概念において解明した社会の関係や集団の研究については、これを学問的に無意義とは見ないで、その成果は私の立場においても十分評価してゆくことが出来ると考えているものでして、この意味において私はみずから形式社会学の単なる破壊者ではなく、むしろその建設的な破壊者と呼ばれてよいと自任し

ている次第です。そして、私はわが国の高田博士や松本教授に対しても、またこれとほぼ同様に一面これを批判しながら他面また評価する態度を貫いて来たつもりです。

私は高田博士とは直接師弟の関係はありませんでしたが、関学時代から接触があり、一時私が中国へ旅行した帰りに博士の故郷である佐賀県の三日月村に赴いて博士の旧家でご馳走になったこともあります。それにもかかわらず、学問的には私が東北大学に移ってから形式社会学の批判を開始するとともに、次第に博士との距離が大きくなって来たことは事実でして、昭和9年にはたまたま私が当時の「経済往来」に頼まれて執筆した匿名評論のなかで博士の民族問題に関する主張が博士の社会学における進化論的な世界主義の見通しと矛盾するものと批判したため、博士の逆鱗を買い、博士がついに同誌上で反論を連載されるようなことにもなり、おしまいに私自身本名を明かしておわびしましたものの、これによって一時私の博士との交情が疎遠化するにいたったこともあります。さいわいこれも歳月が流れるにしたがってもとに復しましたが、だからといって学問的に私と博士との間の距離がちぢまったわけではなく、私自身ジンメルほどでなくても博士の見解に時として批判を試みたことがあり、博士もまた簡単ながら私の行為関連の立場に言及してこれも結局は自分の結合の立場と大した変りのないものと批判されたこともありました。しかし私は博士の結合社会学の立場に対してもジンメルの場合と原理的にはほぼ同様の批判を試みて来ましたものの、博士がその立場において成就された社会のいわば形式的側面の研究の成果については評価すべきものは評価し、特に博士の社会学の組織についてはジンメルのような哲学味や絢爛さには欠けるものがあったても、組織的な点ではかえってこれにまさるものがあると見て来たものでして、結局私は博士とは正反対の極に立っていましたものの、今でももし大正時代に道標的な博士の学問的な業績が出ていなかったならば、その後における日本社会学の発展も不可能とされていたのではないかと考えているものです。

私は松本博士につきましても同じような考え方をしています。博士は一応形

日本社会学の展開

式社会学の立場を肯定しながらもこれを一面的にすぎるものと見てこれを拡大的に補完する意味で総社会学の組織化を企図されていた点で、私とはちがひ、むしろ根本的には高田博士に近い立場に立っておられました。年輩が私に近かったせいもあって、博士は私が岩波の「社会学」を出してから、絶えず私に対して批判を試みられ、私もまたこれに答えて反批判を繰返して来たものでした。とりわけ博士が昭和10年から13年にわたって「社会学原論」、「集団社会学原理」、「文化社会学原理」の三部作を連続公刊し、ほぼその体系化を完成されたころには、私自身またこれと前後して昭和14年に「社会学の基礎問題」を、17年に「社会本質論」を出してようやく行為関連の立場から総合社会学を基礎付ける最後の段階にさしかかっていたところから、博士からその全体にわたってきわめて手厳しい批判をこうむり、いきおひ私もこれにむくいてあえて反批判を展開していたものです。博士の私への批判の要領は、私自身行為関連の立場から総合社会学を展開しようと企図していたものの、行為関連の概念が大ざっぱであるだけでなく、肝腎の総合社会学の実質が実のところ博士の集団社会学の領域を一步も越えるものでなく、また、私が文化の内容的な重要性を強調しているにもかかわらず、私の書いたものなかに文化の考察が全く度外視されているというにあったものですが、私はこれに対して私の場合集団の概念があらかじめ形式即内容の意味を含んでいるところから集団はあらかじめ文化的な意味をも含んでおり、したがって松本博士の場合のように特に集団社会学と文化社会学を部門的に区分する要はなく、かえってここに私の総合社会学の立場が形式社会学を克服し得るものとなっているゆえんがあると反論したものであります。こうした私の松本博士との論争は、終戦後博士の急逝によって残念にも中断されてしまいましたが、私自身最後まで博士の批判に承服することが出来ないで連続的に論戦を繰返して来ましたが、高田博士の場合と同様に博士の総社会学の組織については、それが形式社会学の延長であったにもかかわらず、社会の形式的側面の考察としては高田博士の学問的業績にも比肩し得るすぐれたものと見ていたものでして、私が後に「現代社会学理論のエ

ッセンス」を編集した際、博士を高田博士と並べてあえて世界的な社会学者の一人に選びましたのも、実はかねてから私が博士の研究をそれだけの評価に値するものと考えていたからであります。

振り返ってみますと、私が留学から帰り「社会学序講」や「社会学要講」を書いて総合社会学の構想を練り、さらに「社会学の基礎問題」や「社会本質論」のなかでこれを基礎付けるために行為関連の立場を展開しようとしていたこの時期は、ドイツでヒットラーが台頭するとともに次第にヨーロッパに戦雲が広がって来てついに第二次大戦が勃発し、日本でもこれと平行して満洲事変がおこり、これが日支事変に拡大され、最後には太平洋戦争が始まるなど、学問的な研究にとってはかならずしも好ましいものではありませんでした。しかしそれでも高田博士が経済学に転向されてもなお健在であり、私も松本博士等と伍して時には論争をまじえながら割に気持よく研究を深めることが出来たものでして、戦時下とはいえドイツなどとくらべてみますと、研究条件がはるかに良好であったことは事実です。この時期には東大の戸田博士を中心として家族の研究、さらに村落の研究の分野に数々のすぐれた業績が出て来たものですが、一般的に見て理論的分野でも前代にくらべてある程度の進展が画されたと見てよかったです。

しかし、こうした状況も昭和20年日本がついに敗北を喫し、降伏とともに戦後の時代に入りますとともに、一応終止符を打たれ、それから今日にいたるまでの30余年の間には日本社会学のなかにはこれまでとはちがった新しい変化もあらわれて来たものでした。戦後の日本ではアメリカを中心とした占領軍の支配のもとで着々と民主化政策が推進せられ、まず国家の体制に大きな変革もたらされたことは申すまでもないことでして、このなかには教育制度の変革も含まれていましたが、社会学の研究に関係したものとしては、第一に戦後占領軍の指令で全国の各県に大学が設置され、そこで社会学の教育も行なわれることになったため、社会学の研究が飛躍的にさかんになって来たことを指摘してよいでしょう。そしてこの意味では敗戦も日本の社会学の研究にはかなりブ

日本社会学の展開

ラスになったといつてよいわけです。しかし私たちにとっては、その後社会学の研究がその内容においてどのように変わって来たかということが問題ですが、この側面でも種々の変化があらわれて来たことは事実でして、そのなかでも特に顕著にされて来たことは、これまでのところ、一般に日本では社会学といひますとヨーロッパ社会学がモデルとされ、とりわけ昭和年代に入ってからはそのなかでもドイツ社会学の勃興がいちじるしかったため、その影響が強かったものですが、戦後になってからはアメリカ社会学が新たに導入されますとともに、これがヨーロッパ社会学にかわって日本でもっとも大きな影響力をもつようになって来たことであります。

こうした傾向が生じて来ましたのは、一面占領軍の中心をなしていたのがアメリカであつて、おのずからアメリカの文化や学問がもっとも早くまたスムーズに日本に流入したせいのようにも考えられますが、これに類した現象は戦後日本だけでなく、ヨーロッパのイギリス、ドイツ、フランスでも共通に看取されたところ です。そして、これは戦後のアメリカ社会学の発展から考えますと、むしろ当然すぎる成行でもあつたと見てよいものがあります。ヨーロッパでは第一次大戦後一時ドイツで社会学が大いに勃興しましたものの、ヒットラーの出現後は長続きせず、その他の国々でも第二次大戦が始まって戦火が全欧を蔽うようになってから社会学は沈滞の一途を辿るだけでした。ところが、アメリカは第一次大戦後大不況に見舞われはじめましたものの、その後は内外共に大した波瀾はなく、社会学は社会調査の盛行にともなつて順調に発展し、その後第二次大戦が始まり、アメリカがこれに参戦してからも戦禍が直接本土に及ばなかつたせいもあつて社会学の発展はますます好調を続けたものでした。そして、やがてアメリカが連合国側の中心となつて勝利をおさめ、戦後その伸張した経済的実力によつて西欧諸国の盟主としてソ連と角逐するようになりましたころには、アメリカ社会学はパーソンズ、マートン、ミルズ、ホーマンズ等の名立たる学者の出現によつて、たんに社会調査の領域だけでなく、理論的領域にも卓抜な諸業績が簇出し、特にパーソンズの提唱によつて機能主義が有力な

学派として形成されるにいたった 1950 年代以降になると、事実上アメリカ社会学はヨーロッパ社会学を凌駕し、これまでとは逆にかえって後者に影響を及ぼしつつあったものでして、戦後日本社会学がアメリカ社会学から強力な影響を受けるようになったのも、一にこうしたアメリカ社会学の世界的な優勢化から由来した反映的現象にほかならなかったと見るべきであります。

もちろん戦後日本社会学のなかでアメリカ社会学の影響が強くなって来たといいますが、これが顕著にされるようになったのはパーソンズの「社会体系」が出て評判になってからのこととして、終戦後しばらくの間は大体日本ではほとんど戦前とあまり変りのない状態が続いたといつてよかったです。当時すでに松本博士は亡くなっておられましたが、高田博士は久しぶりにまた社会学に復帰して、昭和 23 年に「世界社会論」と「社会学の根本問題」を連続的に刊行されました。もっと若い世代の学者としては、清水幾太郎氏が昭和 24 年に「社会学講義」を、26 年に「社会心理学」を、尾高邦雄教授が昭和 24 年に「社会学の本質と課題」(上)を、福武直教授が昭和 23 年に「社会学の現代的課題」をそれぞれ刊行されました。しかしこのなかでは戦前からアメリカ社会学に格別の関心を示していた清水氏の場合を除くと、特にアメリカ社会学に触れたものはなく、尾高氏や福武氏にしても社会学の学問的性格を問題にした場合には、私たちとほぼ同様に、形式社会学や総合社会学、あるいはこれに関連した文化社会学を主要な対象として、ただ形式社会学と総合社会学とを打って丸とした第三の型の社会学の構想を理想として追求する方向を打ち出そうとしていた点にやや新しい視角が示されていただけでした。昭和 27 年には日本社会学会の機関誌「社会学評論」誌上で「社会学に対する私の立場」の題で高田博士、尾高氏および私によって討論がおこなわれましたが、この場合も論議の中心となりましたのは形式社会学や総合社会学や文化社会学でして、大体その論議はなお私などが戦前から問題として来た軌道の上にあったと見てよかったです。

ちょうどこの討論がおこなわれた昭和 27 年はアメリカでパーソンズの「社会

日本社会学の展開

体系」が公刊された翌年でありまして、ヨーロッパではこの書が出ますと間もなく、イギリスのヒールドやロックウッド、ドイツのダーレンドルフが次々とこれを取り上げて論評を試みたものでして、これが皮切りとなってヨーロッパでは次第にアメリカの社会学理論が注目をひくようになって来たものでした。これにくらべますと、戦後のアメリカの社会学理論が日本社会学のなかに入って来ましたのはもっと後のことだったといつてよいでしょう。私は昭和 29 年たまたまアメリカへ旅行して帰国する途中、仙台に立ち寄ってくれた昔教え子だった台平大学の陳紹馨君から手土産としてパーソンズの「社会体系」を貰い受けて早速これを読み出し、それから間もなくいま中央大学にいる田野崎昭夫君や東北大学にいる森博君等のいたゼミでこれをキストとして演習をやった記憶があります。当時は高田博士もまたこれを読んでおられたようで、私自身博士からその内容について二度ほど質問のお手紙を頂いたこともありましたが、パーソンズの「社会体系」が日本に入ってから来てからはかなり多くの人がこれを読むとともに、パーソンズに興味をもち出し、これと同時にアメリカ社会学の研究がさかんになって来たようです。戦後の日本で最初にアメリカ社会学の研究書を出したのは当学部にもおられてげんに今日もこの会場に来ておられる大道安次郎教授でして、教授は昭和 23 年「アメリカ社会学の潮流」という本を出しておられます。これはパーソンズが「社会体系」を書く前のものですが、これを見ますと、パーソンズの名前も出ていて、彼が 1937 年に出した「社会行為の構造」の題名も紹介されています。しかし、昭和 29 年に出た早瀬利雄、馬場明男編の「現代アメリカ社会学研究」を見ますと、そのなかに武田良三教授の書かれた「社会学理論」という一篇があり、氏はパーソンズのほかにマートン、ホーマンズにも論及されていますが、その中心的な対象はパーソンズでして、彼の構造的機能的分析が紹介されますと同時に、彼の分析では歴史的パースペクティブが欠落している点に対して批判もおこなわれています。そして、そのうちに、単なる論文でなく、パーソンズを中心としたアメリカ社会学のまとまった研究書も出て来るようになりました。その先駆をなしたものとしては、

おそらく昭和32年当時神戸大学にいた西村勝比古教授の「社会体系論」をあげることが出来るでしょう。これもその内容から見ますと、パーソンズの社会体系論を紹介しながらこれに批判をも加えた点で武田氏の論文と近いものになっております。それからしばらくしまして私も昭和42年、そのころ私は東北大学を定年退職して上京し、明治学院大学を経て中央大学で教鞭をとっていましたが、おそまきながらパーソンズの研究をまとめて「社会学的機能主義」を刊行しましたが、これに続いて45年にはいま当学部におられる中野秀一郎教授の「体系機能主義社会学」、46年には東北大学の佐藤勉君の「社会学的機能主義の研究」などの好著が公刊されるようになり、40年以降ではアメリカ社会学は理論的に日本社会学のなかで全盛を誇るようになって来たものでして、この状態はアメリカ社会学の内部における転変にもかかわらず現在まで続いていると見てよいと思います。

この間ヨーロッパの方はどうかといいますと、これまた日本の場合と同様に、1950年代以後パーソンズの社会学が注目をひくようになりましてから、彼を中心としてアメリカ社会学への関心が高くなって来て、これまでのところ終始アメリカ社会学が理論的に問題の中心となっている点では大体日本と変りはないといってよいようです。しかしこれまでの推移をもっとこまかく追跡してみますと、多少相違点も発見されないではありません。そしてその第一として指摘出来ますことは、戦後アメリカ社会学のインパクトやその重要性が強まって来たという点では日本の場合と同様大差はありませんけれども、アメリカ社会学からの影響の受けとめ方ではヨーロッパの諸国よりも日本の場合がはるかに積極的に強く、この意味で順応的でもあったということとして、これはパーソンズの機能主義の受けとめ方一つをとって見ても顕著にされているところです。パーソンズの機能主義は日本よりも早くヨーロッパに伝わりましたが、その後の状況を見ますと、当初からこれに対する批判が強かったせいか、その後今日までパーソンズはたえず問題の焦点におかれて来ましたものの、彼の立場を受け入れてパーソンズ流の社会学の展開を試みたものはさほど多くなく、その後

日本社会学の展開

大なり小なり彼を問題としたイギリスのレックスやギッティンスやバーシャディ、フランスのシャゼルなどの学者はかなり根本的な点でパーソンズに対して疑義を提出しております。このなかにあつてドイツではルーマンなどが珍しくマートンの機能主義の見解を展開して等価的機能主義といった立場を打ち出していますものの、彼にしてもパーソンズの行為理論や社会体系理論の図式的な前提をそのまま継承しこれを発展させているわけではありません。このように見て来ますと、パーソンズが不断に論議の対象とされて来ているにかかわらず、意外にもその影響は消極的であつたような印象を与えるものがあります。

これに対照しますと、日本の場合、パーソンズの社会学が日本に紹介された当初にはヨーロッパ並みにこれに対する批判も出ていたものですが、その後になりますと、むしろパーソンズの機能主義の基本的な前提をなす図式を行為理論から社会体系理論にいたるまで全面的に受け入れてパーソンズ流に社会学を組織化してゆこうとする企図がかなり有力化して来っており、しかもこの傾向は戦後の若い世代の学者のなかにかなり強く定着しようとしているようにも思われます。パーソンズの機能主義も1970年代になってからはアメリカでも絶頂を越したと見るものがあり、ポスト・パーソンズ主義の時代の到来を説くものもありますが、彼が1950年代以後アメリカ社会学のなかでその精力的な活動によって正統的地位を築き上げその門下の多くのすぐれた学者がげんになお彼の社会学の展開に努めている以上、日本で彼の影響のもとでパーソンズ学派が発展するのは特に異とすべきことではありませんが、ヨーロッパとくらべて見ますと、やはりここに一応の相違が認められることは事実です。

これはアメリカ社会学がいま理論的に全盛をきわめているにかかわらず、ヨーロッパ社会学の場合、過去における伝統の強さがなお残っているせい、あるいはまた逆に日本社会学の場合、理論的にこれに対応するものが脾弱であつたせい、そのいずれとも解されないではありませんが、私などは戦前から自分なりに総合社会学の枠内で行為関連の立場などを構想して来ましたせい、アメリカ社会学の戦後の成果を全体的に評価し、ミード等につながる象徴的相

相互作用主義などにかなり魅力を感じますとともに、パーソンズの機能主義にも大きな関心を寄せて来ましたものの、彼の主張のすべてをそのまま受け入れることが出来ず、「社会学的機能主義」を書いてからも、なおこれに対しては批判的な態度を持ち続けて今日にいたっております。彼の社会学の組織はいわば過去一世紀半に近い社会学の諸々の伝統を輻合したかたちになっていて、しかもその組織がきわめて論理的でもあり、なかなか見事なものであります。彼の社会学の概念はジンメルとはかならずしも同一ではありませんが、その対象はかなり狭く限定された意味での統合としての社会的共同体として、彼の立場は私のそれとはかなりへだたっております。しかし、彼はこれとは別に社会体系の概念を設定し、これに統合のほかにも適応としての経済、目標達成としての政治、型象維持としての教育その他を含めて、これを全体的に研究する社会体系理論をも展開しています。これはその対象の広さからいって、私が総合社会学の立場で追求しているものに近いといつてよいでしょう。その上彼はさらに社会体系を人格体系や文化体系や行動的有機体体系と並べていずれも人間の行為体系の特殊的部門をなすものとみなし、これを一般的に考察する行為理論をもって社会体系その他を一般的に基礎づけようとしています。この最後の考え方などは私自身総合社会学の立場からこれを基礎づけるものとして行為関連の立場を提唱しているところから、私にとってきわめて興味のあるものです。しかし、彼の社会体系理論が社会の総合的認識の企図として投入産出分析や四つの媒体の研究などによって示唆するものが多いといいましても、その基本をなす社会体系を経済、政治、統合、教育等々に区分する考え方にはそのまま賛成するわけにゆかず、彼の行為理論にしましても初期の主意主義の主張のなかには人間行為の創造性を強調した点で共鳴し得る点が多いものの、後になるほどむしろ行動主義的な色彩が強くなって来た感じがあり、歴史性や実践性を重視する私の立場とはかなりくいちがいが生じて来たようにも受取られます。こうした点は昭和30年代までに日本で西村教授や武田博士によって問題とされたところですが、その後はあまりこうした批判的な方向に発展はなく、かえりみますと、

日本社会学の展開

何か私がひとりで時代おくれの批判をくり返している観もないではありません。しかし、ヨーロッパでは日本とちがって当初からかなり強く批判的な見解が提示され、むしろこれが大勢をなして来ており、またアメリカでも 70 年代以降になってからグルドナーの「西洋社会学の当来的危機」を契機としてパーソンズ批判の傾向が顕著化して来ているのを見ますと、私のように批判的な見地をとりつづけているのも、あながち時代遅れでもないような気がするのであります。

私がこのようにあえてパーソンズを例にあげて彼の社会学理論について種々意見を述べましたのは、一つは教授が昨年関学に来られて皆さんにとって多少身近な存在になっていると思ったからでもあります。彼は何といひましても当代随一の大社会学者でありまして、その社会学理論に不満があるからといって、それを簡単にかつてミルズが試みたように内容空虚な誇大理論として葬り去ることは出来ません。私は彼の社会学、社会体系理論、それからその基礎をなす行為理論のいずれに対しても批判的な意見をもっていますものの、批判はよしとしてそれでは自分でこれにかわるものとしてどれだけ積極的な見解を用意しているかと反省してみますと、あからさまにいつて現在まだまだ自分でも満足し得る成果をあげていないことは事実です。ただ私が総合社会学の見地に立って一面社会を巨視的にとらえその全体について分析的認識を越えた総合的認識を企図しながら、反面にはその出発点を個々の人間の意味的な行為の関連に求めようとしたのは、一にこれによって単に集合的な社会の概念を重視するあまりこれを人間から切り離し究極において社会学を人間不在の社会学たらしめることをチェックし、これによって人間の、人間のための、そして人間によつての社会学を打ち建てようとする気持がそもそも昔から私の社会学を研究する志向のなかに動いていたからであります。私が社会学の立場として幅の広い総合社会学を看板にしていながら、逆にまたそのなかで個々の人間の存在をもまともに見据える力がなければならないなどといひますと、なかなか厄介なことをつきあわせたようなことにもなりかねませんが、少し極言いたします

と、この意味では社会学を研究する人々は個々の人間を研究する個人学をも平行して進めてゆく心構えが必要でありまして、これによって私たちは社会を一枚岩のようなものと考え、そのあげくに人間が社会から抜けてしまうようなことを防ぐことも出来るのではないかと考えている次第であります。

さてこれまで種々と話してまいりましたが、何分演題が「日本社会学の展開」という大きなものですから、ついまとまりのない内容のものになってしまいました。日本社会学については説き足りない点多々あったと思いますが、歴史的にこれまで見て来ましたところでは、日本社会学のなかに過去から現在にかけて先覚者の学問的業績のつきかさねによって一応世界の社会学のなかである地位を確保することの出来る将来のための布石がしかれて来たことはたしかであるといってよいでしょう。これはたんに一般理論だけでなく、家族、都市、村落、その他の特殊な研究にもあてはまることです。このなかにありまして、私などのやって来たことは学問的に貧者の一燈にすぎないものですが、狭い自分の体験を通して申し上げたことがほんのわずかでも皆さんがたのご参考になることが出来ましたならばさいわいに存じます。最後に、一種の里帰りのような気持ちにひたりすぎまして、時間の長さのわりには駄弁を弄しすぎた点もあることをおわびして、この講演を終ることにしたいと思います。